



## 今日のおまんまと明日のなにか

映画のDVDを1・5倍速で見るという人に遭遇し、心の底から驚いたことがある。倍速再生でも話の筋は十分追えるし、感動の涙を流すこともある。結果は同じ、いや、むしろ得じゃね？ 短い時間で同じ効果を得られるんだから……と言われれば、返す言葉は、ない。

けれどもやはりそれはたぶん、映画を見るときとは根っこが違うと、私は思う。無駄なような、なくてもいいような細部に、映画的生命は宿っているのだ。

考えてみれば現下の日本政治もまた、1・5倍速的だ。議論をする。説得を試みる。合意を調達する。手間と時間をかけて織り成すプロセスこそが民主主義であるはずなのに、シュルツと早回しされ、民主主義は多数決であるかのごとく矮小化されている。

「結果」がすべて。そんな倍速政治において、人間は単なる「1票」におとしめられ、勝者の「道具」にされてしまふわけだが、さて、そもそも私たちは選挙で何を選んでいるのだろうか。「勝者」

ではない、「代表」を選んでいくのだ——はいはい、うそくさいよね、そんなの。でも、うそくさいからこそ、結果ではなく、プロセスを大事にしないと壊れてしまう。民主主義はなぜ大事か。皆が大事に扱うからである。

もとより映画は、見るたびに新しい発見がある。このほど見返した「昭和残侠传」もそう。これまでまったく記憶になかったシーンが、生き生きと立ち上がってきた。

「あつしら、明日のことを考える余裕がないんだ。今日のおまんまが食えりゃ、それでいいんだ」  
舞台は敗戦直後の東京・浅草。長年世話になったテキヤの関東神津組から、新興勢力の新誠会に乗り換えた露天商が、その理由を吐露する。

「今日のおまんま」と「明日のなにか」。英国の国民投票を眺めても、日本の参院選をみても、詰まるどころ、天秤にかけられているのはこの二つなかもなあと、神津組5代目・寺島清次を演じる高

倉健の色気に酔いつつ思う。露天商の、いかにも今日のおまんまのことしか考えてなさそうな笑顔はまぶしく、切ない。彼はだまされているのだ。新誠会に、まんまと。

うそをつく。力に物を言わせる。己の利益になるなら手段を選ばないのが新誠会。やり口は汚い、汚いがゆえに、傘下に入れば「得」をする。

これに抗する寺島が提示するのは、「渡世の仁義」だ。世の中には、どんなに力を持っていても、やっていいことと悪いことがある、と。

社会は、実はそういう目に見えないものに底支えされているのだけれど、皆が自分の今日のおまんまのことしか考えなくなれば、あっさり壊れる。社会の底が抜ける。

参院選。結果が日本の今後を左右するのは間違いない。しかし結果よりはるかに大事なのは、誰が勝者になるうとも、「道具」にされない私たちであること。目には見えないそれぞれの明日を、信じる力を持ち続けることだろう。